

井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

思い出賞：山下俊樹

繋いだ掌



シワシワで厚ぼったい掌。ぎゅっと握ると、大きくて温かかった手のぬくもり。

私の五感の奥底に眠っている祖父の思い出だ。

家から徒歩5分。

祖父と私は、大雨でもない限り毎日、井の頭自然動物園へと散歩に出かけた。高齢の祖父も幼い私も、「無料」で入園できるという都合のよい事情もさる事ながら、なにより私が率先して祖父の手を引いた。私のお気に入りの場所だったのだ。

ぎゅっと握った手を引いて正門の脇の横断歩道を渡る。顔なじみのお面屋さん。入り口の綿菓子屋台の甘い香り。

園の門をくぐるやいなや、繋いでいた祖父の手をぱっと離し、私は小走りに駆け出すのだ。

ジャッ、ジャッ、ジャッ、と運動靴の下で小砂利が音をたてた。

らくだの檻の前ではちょっと鼻をつまみ、花子に挨拶をして一目散に温室へと向かう。なにせ、私の一番の目的地は2階にある売店なのだから。

汗をかいたガラスケースのスライド扉を開き、精一杯背伸びをして冷蔵庫の底へと手をのばす。生暖かい温室で食べる冷たいアイスクリーム。私にとって、そこは不思議な別世界だった。

ジャングルのように大きな葉を広げ、うっそうと生い茂る見慣れない南国の樹木たち。鮮やかな花で昆虫をおびき寄せ、餌にになってしまうという奇怪な食虫植物。

ちょっとだけ怖くなった私は、左手で祖父の掌をぎゅっと握りしめ、そして安堵し、また右手のアイスクリームに熱中するのだった。

今、私の掌の中には、小さな柔らかい温もりがある。

花子の前で立ち止まり、その大きさに驚いたのか、それともシワだらけの痩せた身体にビククリしたのか、不安な表情を浮かべて私の顔を見上げた娘は、繋いだ小さな掌をぎゅっと握りしめ、そして、安心したような笑みを浮かべて、花子に向かって手を振った。